

冷戦下旧ソ連の日本語教育史の一断面

— 日本の国立大学の 20 年に及ぶ試み —

小川誉子美（横浜国立大学）

ogawa-yoshimi-tr@ynu.ac.jp

【要旨】

冷戦時代のソ連・東欧との学術交流については、東海大学等の学生交換や日本語教育の取り組みが報告され、その画期的な試みについて広く知られている。一方、大阪外国語大学ロシア語学科は、ソ連からロシア語教育の専門家を受け入れるとともに、レニングラード大学東洋学部に教員を派遣し約 20 年の間、当地の日本語教育に携わった。大阪外国語大学ロシア語学科、レニングラード大学日本学科は、ともに、優れた人材を世に送り出してきたことで知られる。本稿は、当時の制度や教員自身の目から見た当地の日本語教育の概要を報告し、日本人講師のかかわり方に注目した日本語教育の一類型について紹介するものである。

1. 目的

国際交流基金は、冷戦時代の東欧各地の諸機関に対し、日本語教育の専門家を派遣していたが、ソ連には派遣していなかった。国際交流基金によるソ連への派遣は、ソ連崩壊以降に開始され、それ以前のソ連の日本語教育については、モスクワ大学と協定を締結し学生の交換をおこなっていた東海大学の発信する情報が主なものであった。そんな中、レニングラード大学（現サンクトペテルブルク大学）東洋学部の日本語教育の教壇には大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）¹の教員が立っていたことが明らかになった。すなわち、冷戦時代、ソ連との間で学生交換のみでなく教員の交換が行われ、国立大学の教員も継続的に日本語教育の教壇に立っていたのである。

本稿は、日ソ間の交流に厳しい制限がある中、1970 年代から 80 年代にかけて、日本の国立大学が教員を継続的に派遣した例を取り上げ、冷戦時代のレニングラード大学の日本語教育の一側面について記述するものである。

2. 1960 年代までのレニングラード大学

1970 年代以降の日本語教育をテーマとするにあたり、本節では、その前史として、1960 年代までのレニングラード大学の日本研究の展開と日本人講師の概略を紹介する。

2.1 日本研究の展開

帝政ロシアの時代、日本研究は、中国・日本学科の一部として行われていたが、ソ連時代には独立し細分化された。粛清で多くの東洋学者を失い、第二次世界大戦で大学が疎開するも、日本学科は新

¹ 本稿では当時の名称、レニングラード大学、大阪外国語大学を使用する。

入生を募集し、教育、研究とも継続した。そして、第二次世界大戦終結以降も 1950 年代に至るまで、細分化された各領域で多くの学位が授与され成果が刊行された。その後も研究体制が緩むことはなく、これまでのレニングラードや極東のウラジオストックを中心とした体制から、新たな東洋学の拠点としてモスクワがその存在感を高めてゆくのである。アメリカやイギリスが第二次世界大戦中、大戦後と総力をあげて行った日本研究、日本語教育は、日本占領の終結、サンフランシスコ平和条約の締結とともに一定の役目を終え、1950 年代には、規模を大きく縮小したが、ソ連の日本研究は、1956 年の日ソ共同宣言後も勢いが衰えることはなかった。

日露戦争を経て、ソヴィエト政権成立当初から、日ソ関係は、武力衝突を引き起こし、緊迫する中、日本語教育の需要が高まっていった。ロシア革命後日ソ共同宣言後までの約 40 年間の日本語教育については、寺川 (1964)、ペトロワ (1964)、梶 (2009)、アルパートフ (1992)、ルイービン (2006) などをもとに、小川 (2020a) で報告した。

2.2 日本人教師：1960 年代まで

帝政ロシアの時代につづきソ連時代にも、日本語母語話者が日本語講座の教壇に立った。レニングラード大学では、1950 年ごろから日本語を教えた岸田泰正が、ハチダイメサン (八代目さん) とよばれていたことから、戦前に七名の教師がいたことになる。この七名のうち、次の四名は帝政時代に日本語を教えた。初代教師は、幕末にプチャーチン一行の船でロシアに密出国し、漢文通訳のゴシュケビッチとともに和露辞典を作成し、ロシア外務省の通訳を務める傍ら日本語を教えた禅宗の僧侶橘耕斎、二代目、三代目は、ペテルブルク大学で行政学等を学び、在露日本大使館書記生となった西徳二郎や安藤謙介、四代目は、東京外国語学校のロシア語科を卒業し、単身ロシアに渡り、ペテルブルク大学で 30 年に及び日本語を教え、教材を多数編んだ黒野義文である。ソ連時代には、西本願寺派遣留学生としてレニングラード大学で学んだ戸泉憲溟のほか、二名 (大阪外国語大学ロシア語科、東京外国語大学ロシア語科出身者) が確認できる。このように、ロシア語やロシアの学問に造詣の深い者であった。ソ連時代の二人について紹介しておこう。

六代目は、池田久雄 (?~1929) は大阪外国語学校 (後の大阪外国語大学) 露語部の一期生であり、日ソ国交回復後間もなく、ソ連に渡りレニングラード大学の教壇に立った。しかし、当地で病を得、帰国後まもなく他界する。池田は橘耕斎から教え、六代目の講師となるが、詳細は不明である。京都大学文学研究科図書館には、彼の名前を冠する「池田文庫」がある。「池田久雄氏旧蔵の語学・文学・社会学・芸術など広範囲にわたるロシア語文献コレクション」²と記され、2159 冊を収めている。京都大学によると、1933 年に家田孫七氏から寄贈されたという。短いソ連滞在ではあったが、その間に収集したものと思われる。

七代目の鳴海完造 (1899~1974、東京外国語学校ロシア語科卒) は、1927 年に詩人の秋田雨雀がロシア革命の十周年祭に招かれた際、通訳として秋田に同行し訪ソした。秋田が帰国した後もソ連に残り、1928 年に、レニングラード大学で日本語を教える機会を得た。毎日新聞囑託や日本大使館囑託を務め、1936 年に帰国した。鳴海は、市井のロシア文学愛好家として知られるが、帰国後は故郷の青森県の弘前大学で図書館司書を、東海大学でロシア語教師を務めた。彼もまたロシア語書籍のコレクタ

² 京都大学大学院文学研究科図書館による。<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/lib/research/special-collection>

一であった。彼のコレクションは、ロシア近代文学や演劇、歴史、社会思想史、民俗学の分野の 4392 冊からなるもので、一橋大学に鳴海文庫として収蔵され、2011 年に常設展示された。池田と鳴海は、ロシアの学問や文化に造詣が深く、ロシア文献のコレクターであったという点で共通する。

それに対し、八代目の岸田泰政は、戦後間もないころから教壇に立ったが、その時期、経緯は不明である。これまでの教師のように、ロシア語ができたという記録はなく、ロシアの専門家でもなかったが、1960 年には助教授 (Docent) に昇格し、20 年におよび教壇にあった。当時の学科長によれば、日本学科の全教授陣に、日本文学の特別講義や日本語の特別講義を行い、よき援助者であったという。その一方で、岸田は、1960 年代後半からレニングラード大学やソ連の生活に関する記事や著書を刊行し、教え子やソ連社会を短歌に詠み、積極的に日本に紹介した (小川 2020 b)。

3. 1970 年代以降の日本語母語話者講師

岸田は、1950 年前後から 1970 年ごろまで教壇にあったものと思われる。岸田が去ったあと、今度は、ロシア研究者が日本語の教壇に立つようになった。

3. 1 経緯と資料

岸田泰政についてヒアリング調査をする中、1970 年以降のレニングラード大学に、ロシア語が堪能でロシア事情に詳しい教員が一年交替で教壇に立っていたということが複数の卒業生から寄せられた。さらに調査を進める中、このロシア専門家とは、大阪外国語大学のロシア語学科の教員であることが判明した。大阪外国語大学は、西夏語の解明で知られるニコライ・ネフスキーや、音声学のオレステ・プレトネルがロシア語の教壇に立ったことでも知られる大学である。

同語科発行の紀要『ロシア・ソビエト研究』(大阪外国語大学ロシア語研究室、1961 年創刊、1993 年に終刊) の 17 号 (1993 年発刊) の「終刊にあたって」に、

「交換留学先の (旧) レニングラード大学東洋学部で、共に日本語教育にたずさわった偉大なピーヌス先生とバービンツェフ先生をも喪った」(180 頁)

という一節があった。さらに、『ロシア・東欧研究』第 2 号 (1998 年刊行) に掲載された三名の退職教授の略歴に、それぞれ、「ソ連邦国立レニングラード大学東洋学部に交換教授として赴任」という経歴が複数記されていた。また、『ロシア・東欧研究』第 12 号 (2007 年刊行) には、山口慶一郎による特別寄稿「ロシア語学科 85 年の歴史を追って」にソ連からロシア語専門家を受け入れた経緯を概説する中で、派遣についても言及があった。また、「大阪外国語大学 70 年史」には派遣の経緯も記されていた。しかし、派遣された教員名や日本語教育の内容については情報がなかった。そこで、卒業生の方に加え、交換教授として赴任された方から、貴重な情報提供を受けるという幸運に恵まれた。

次節では、山口 (2002)、山口 (2007)、大阪外国語大学 70 年史編纂委員会 (1992) とともに、日本語教育の内容については、提供された情報をもとに紹介したい。この情報は、当時のロシア語科教員二名、当時の学生 (1970 年代一名ブルガリア人、1980 年代一名ロシア人) によるものである。なお、ロシア人から提供された情報は、60 年代以降の卒業生とのネットワークにより寄せられたものである。いずれも、現時点までに、公文書などロシア側の一次資料の参照がかなわず、以下の内容については、ロシア側の一次資料とのクロスチェックを行っていないものも含むことを断っておく。

3.2 制度

ここでは、交換教授として赴任された方から寄せられた内容と日本語で発行された文献からの情報をもとにまとめる。文献情報は引用元を記す。

3.2.1 交換教授派遣と背景

大阪外国語大学の教員がレニングラード大学で日本語教育に関わるようになったのは、大阪外国語大学ロシア語科がソ連高等教育省との間で交換教授の約定を締結したことから始まった³。当時、ロシア語学科では、ロシア語を母語とする教員確保が課題となっていたが、学科の教員がソ連に出張した際に、ロシア語教育専門家の派遣要請の交渉を行い、それが1968年に実現したのである。一方で、学科の教員がソ連で研究に従事する機会も必要としていた。ソ連での研究と並行して、レニングラード大学東洋学部の日本学科の日本語教育を担当することでソ連から給与を得たのである。こうして、ソ連高等教育省が推薦するロシア語教育の専門家と、大阪外国語大学ロシア語科の教員が、それぞれ、1年交替で、大阪外国語大学でロシア語教育を、レニングラード大学で日本語教育を担当する制度がスタートしたのである。

日本人の教員は、ソ連からフラットおよび現地通貨であるルーブリで給与を支給され、ルーブリによる生活を営んだ⁴。ロシア専門家にとって、「これ（ルーブリで生活すること）でソ連の実生活をより深く理解することができた」（山口2007）という。

3.2.2 レニングラード大学東洋学部への派遣⁵期間：

大阪外国語大学ロシア語科からレニングラード大学東洋学部への派遣は、1970年から1991年まで行われた。ただし、1974年から76年にかけて中断期間があった。ソ連高等教育省が、一度だけロシア語教育の専門家ではなく、レニングラード大学東洋学部日本学科のボリス・レチキン⁵を派遣したことがあったが、レチキンが、帰国間際に、大阪に滞在中に教え子である妻（アルメニア人で父は政府高官）を残してアメリカに亡命するという事件をおこし、この後ソ連からの派遣が途絶えるということがあった。「交換」制度であったため、日本からの派遣も一時停止されることになったのである。

このほか、日本のモスクワオリンピックボイコットの影響で、日本語教育に携わっていた日本人の教員が早期帰国を余儀なくされたケースもあった。このようなケースもあったが、教員の交換は、ほぼ滞りなく、足掛け20年以上に及び行われた。

3.3 日本語の教壇に立った教員

レニングラード大学東洋学部の日本語授業を担当したのは、女性一名を含む九名の教員である。

1920年から1930年代の生まれで、大阪外国語大学ロシア語学科や京都大学経済学部、京都大学文

³ 国交がなかったため、ソ連高等教育省と日本の文部省との締結とはならなかったという。ただし、日本政府は、65年以降、政府間取極に基づき、ソ連高等教育省との間で学者・研究員の交流を行っている（外交青書「わが外交の近況 1985年版(第29号)」外務省）。

⁴ 待遇面は、ソ連の大学教授の最高級の報酬、ならびに、フラット（3LDK）が貸与され、ソ連からの交換教授もほぼ同等の待遇が約束されたという。ただし、フラットについては時期によって異なる。

⁵ 当時は、「赴任」「派遣」ではなく「出張」と呼ばれていたが、本稿では「派遣」と呼ぶ。

学部、ルンバ大学を卒業、修了し、各領域のロシア専門家として研究成果を世に送り出すとともに、日本のロシア人材を育成した。本制度では、契約は一年であったが、多くは交換教授として、複数回渡航しており、中には、交換教授として四回渡航した教員もいる。また、在外制度などをあわせて、ソ連・ロシアへの渡航は10数回を数えた教員もいる。

3.4 担当授業について

3.4.1 授業形態

日本人教員が担当したのは、日本語専攻と日本史専攻の学生の授業であった。後者は週に2回程度であった。学生は両学科とも隔年募集で1学年6名程度であった。

日本人講師は、基本的にロシア人教師とペアで担当したが、単独で教室に入ることもあった。日本人教員は、作文の添削や会話、それぞれの専門分野で「日本事情」などを担当した。ペアで行う作文の授業の場合、ロシア人教師が問題を出し、学生が板書で回答して日本人教師が説明しながら、添削するという方法であった。日本人教師が一人で教える場合、日露の近代文学を素材とする場合、雪や雷鳴などの取り上げ方を比較したりした。

ロシア人の教員の授業では、板書内容を学生がノートに書き写し暗記をするという流れが多かった。日本人教師が担当する会話の授業では、そのルーティンから解放されたという手応えを感じることもあった。彼らは、日本人教師とは日本語で話した。教師がロシア語を話しても、必ずといいほど日本語で返ってきた。

日本事情として時事問題をテーマにすることもあった。学生たちは大変積極的でいろいろな質問が出され、なごやかな雰囲気であった。日本人教師への期待は、派遣された先生の個性と専門分野にもよるが、概して大きかったという。「聞けない」話が聞ける「楽しみ」があったと推測されるが、好奇心旺盛、意欲旺盛な若者に共通なことであったのではないだろうか。

3.4.2 教科書・教材・課外授業

ソ連には、戦前から何冊もの日本語文法書が作成されてきた。しかし、教室に備え付けの簡易な日本語テキスト（書名不詳）が置かれていたともいうが、当時のレニングラード大学では、学生たちが指定された教科書を持つということはなかったという。例外として、ヴィクトール・ルイービン教授は、日本で出版された吉田弥寿夫著「Japanese for Today」(1971, 学研)を用いたことがあった。しかし、社会主義時代に、外国の書籍や外国語の学習書が書店に並んだり、図書館で借りられたり、コピー機が利用できたりするわけではなく、教員が板書した内容を、学生がノートに取るという方法が一般的であった。このほか、山口(2002)によると、ブガエフ教授は、日本で出版された井桁貞敏著『露語文法詳説』(1934年 橘書店)、除村吉太郎著『露文和訳から和文露訳へ』(1936年 橘書店)⁶を使用したという。

日本から持参した教材はほとんど使えず、ロシア人教員が準備した。日本の作家の小説や文学書などの1頁分ぐらいの謄写で、それを受講生に配布し、授業が終われば回収、また別のクラスで使うという方法であった。学年があがると、インツーリスト(ソ連の旅行社)の日本人観光客のガイド実習

⁶『露文和訳から和文露訳へ』の刊行は1967年、除村吉太郎の1936年の刊行物は『ロシア語第一歩』(白水社)とある。書名が正しいとすれば、刊行年は1967年ではないかと推測される。

があった。なお、日本に関する情報は限られており、テレビや新聞、映画、旅行者から入手した情報が主であったという。

3.4.3 試験

帝政時代からの伝統で、学期末試験、入学試験、卒業試験ともに口頭試験であったという。卒論は日本文学等の翻訳と解説が各自に振り当てられた。口頭試験は全教員の前に、机の上に折り畳んで置かれた数枚の問題から一枚を選び、設問に答えるという方法であった。

3.4.4 学生の顔ぶれ

レニングラード大学東洋学部の入学者選抜は、競争率が高く、厳しい選抜を経てきた学生たちは、勉学意欲が高く、好奇心が旺盛で、真面目で熱心に授業を受け、予習も復習も完璧であった。

ロシア人、連邦諸国（バルト諸国、アルメニア、ウクライナなど）から選抜された学生のほか、ブルガリア、スロバキア、ポーランド、ベトナム、モンゴル出身者もいた。中には、母国に戻ってから日本政府の国費留学生として日本に留学し、母国に戻って政府の役人、第一線の研究者として、また、翻訳通訳者として活躍した者も多い。日本政府から外務大臣表彰受賞者として功績が称えられた者もいる。

留学生らが留学先としてソ連を選択したのは、教育の質が高く、学費が安いことも魅力であったという。ソ連で日本研究を選択した理由として、当時母国が工業化を目指し、日本との関係、対日関係を発展させる必要があったという。

4. 時代背景

4.1 1960年代までの大阪外国語大学ロシア語学科

この背景にある大阪外国語大学の事情は次のようなものであった。山口（2007）によると、1949年教育改革、学制改革によって、ロシア語科はコースが多様化し、定員が大きく増員された。52年には別科（ロシア語は聴講生定員50名）を増設、1965年には、ロシア語学科の学生定員が50名に増員され、外国語学部には夜間専攻の第二部が新設され定員は30名に（卒業に必要なロシア語の単位は86単位）なった。

このころ教員二名が、1966年度、翌67年度に相次いでレニングラード大学に夫々の専攻分野の研究のため文部省の長期在外研究員として出張した。当時の学科長はこれを好機と、両名に現地でのソ連人教師派遣要請活動を託した。こうして、1968年には、ソ連高等教育省からの推薦で、初代ロシア語教員が大阪外国語大学に派遣された⁷。ロシア人教師をソ連から受け入れる一方、学科所属の教員をロシアにおける日本学のメッカであるレニングラード大学に派遣する計画をすすめた（山口2007）。

ロシア実地研究の必要性については、当時の教員の方から次のような説明をいただいたので、記したい。

⁷ この講師は、レニングラード大学のガリーナ・ピャドゥソヴァ講師であり、フランスでロシア語を教え、カンボジアのシアヌーク殿下のロシア語教師を務めるなど豊富な経験を持っていた。しかし、1968年当時、日本は学園紛争が全国に広がり、学生たちは十分に授業を受けることができなかった。

「大阪外国語大学が「交換制度」を始めたいと動き出したのは、1956年末に日ソ共同宣言で国交回復しても、ロシアで直接研究できる機会がいつ持てるか分からず、また外国人教員は高齢で「亡命」者であり、現代ロシア語やソ連事情の知識に不足があった。大阪外国語大学は、ネフスキー先生、プレトネル先生のルーツを持ち、学科スタッフはモスクワより歴史のあるレニングラードに憧れていた。」

4.2 日ソ間の交流：日本対外文化協会の設立

大阪外国語大学のこの制度に続き、1970年代には、日ソ間の学術交流に関し、大きな出来事があった。それは日本の東海大学が、ソ連のモスクワ大学との間で協定を締結し、学生交換を行うようになったことである。その経緯について、伊藤（1990）などをもとに紹介する。

1964年、成田知己社会党書記長がソビエトを訪問した。フルシチョフ首相らと会談した際、ソ連側から、「日ソ間で広範囲な学術・文化交流を推進するのはどうだろうか。日ソ関係を発展させるためには国民間の相互理解が大切であり、その鍵を握っているのが文化交流である。ソ連には‘ソ連対外友好文化交流団体連合’という世界各国と民間交流を行なう社会団体があるので、日本側が賛成ならばこの団体を紹介したい」という提案があった。訪ソ代表団は帰国後、河上丈太郎委員長に報告、委員長も賛成し、「このような意義のある社会性の強い仕事は、枠を広げて国民全体が参加出来るようにするのが望ましい。この組織の代表は松前重義氏にお願いするのが良い」との意向が示された。そこで、東海大学総長をつとめ、社会党右派議員であった松前重義氏が、ソ連東欧との学術文化交流をはかる「日本対外文化協会」会長に任命され、各方面の協力を得て、自身の大学で学術交流を実施するという運びになった。

この背景には、戦前のヨーロッパに留学した経験を持つ松前重義氏が、かねてからソ連、東欧の社会主義諸国と日本がより深く交流すべきであり、特に日ソ間の安定した国家関係の樹立こそ、将来の経済的発展にも、また日本の総合的な安全保障にとっても不可欠な課題という認識があったことによる。

冷戦時代のこの壮大な試みは、極めて画期的であり、実施さらに継続するには大きな困難がともなったことは各報告からうかがえる。東海大学でモスクワ大学から派遣された学生を対象とした日本語教育を担当し、交渉を間近で見ていた柴田俊造氏は、次のように述べている。

「（東海大学は）日本政府にとっては社会主義国との交流は否定的で、余計なことをするなというのを押し切ってソ連、東ドイツ、ブルガリア、ハンガリーと学術交流協定を締結していきました。当時社会主義国と協定を結んだ日本の大学はほとんどありませんでしたからね。これは松前総長の思想を超えた学問の追究という一つの哲学ともいえるものなのでしょうね。素晴らしいことだとも思います。」（柴田・関 2016）

1973年10月、モスクワ大学と東海大学の学術交流協定が締結された。その背景には、社会党右派議員を務める松前氏のビジョンとともに、国内外の広範な人脈があったと思われる。

5. 小括

5.1 時代と特徴

日本政府は、1965年以降、政府間取極に基づき、ソ連高等教育省との間で学者・研究員の交流を行なうようになった（外交青書「わが外交の近況 1985年版(第29号)」外務省）。しかし、その交流は極めて小規模なものであった。そんな中、東海大学は、党の後押しがあったとはいえ、政府の方針とは相いれない方向で、1970年代にモスクワ大学と学生交換協定を締結、学部レベルで東欧課程を設置し東欧人材を育成し、長期にわたり学生交換を行ってきた。これを成し遂げた日本の大学は、私学の中でも、東海大学のみであった。

それに対し、大阪外国語大学は、東海大学より早く人的交流を開始した。ソ連高等教育省との交渉は、本来なら、国立大学ではなく文部省であろう。しかし、政府がソ連との交渉に極めて慎重であった時代、大学がソ連高等教育省と交渉し、交換制度を実施させ、20年以上にも渡り継続したことは驚くべきことであろう。大阪外国語大学からの派遣が始まった1970年当時、日ソ間は文化協定も結ばれておらず、学生も研究者も、ロシアに留学する機会は、特別なルート（政党、労働団体など）で推薦された者だけであった⁸ということを考えればなおさらである。

「日本の国立大学教員がソ連政府から滞在費を支給されて出張するという先例がないためその実現には多くの困難を伴った」（山口 2007）

大阪外国語大学と日本の文部省、在日ソ連大使館とのやり取りについては、証言の断片からも、相当な時間と努力が必要であったことは容易に推察できる。本来なら、ソ連高等教育省と文部省の間での取極めとなるだろうが、日本側は文部省ではなく一国立大学であったということからも、当時の困難よりは想像に難くない。

大阪外国語大学ロシア語学科は、2007年の大阪大学との統合により、現在の大阪大学外国語学部ロシア語専攻に引き継がれているが、その源流は、1922(大正11)年に大阪外国語学校が開校すると同時に発足した「露語部」である。それを受け継ぎ、1944年に大阪外事専門学校を経て、一世紀にわたり、日本におけるロシア語教育の中核的存在として多くの人材を輩出してきた。これからはロシア語の時代だと言われた時代にロシア専門家として研究を開始するも現地調査が困難な時代、60年代には、日本の文部省の在外研究制度でソ連に渡ることも可能であったが、機会は極めて限られていた。「交換制度」はこれを補い、また、現地の日本語教育に息吹を吹き込んだ。

5.2 意義

当時の学者たちの苦悩について、黒岩（2014）は、ソ連・東欧をフィールドとする研究者、特に文学者たちの多くは政治的立場と研究を切り離していたという。日本ロシア文学会はイデオロギーとは一線を画した中立的なスタンスをとったが、それは自ずと、ソ連本国とは一定の距離を置くことにつながった。戦後もソ連と疎遠であったことは、結果として、日本に生きたロシア語を使えない研究者を増やすことになったと指摘している。

その一方で、大阪外国語大学のロシア研究については、次のような記録がある。

「私がこの旅行中に学んだことの一つは、活字の上だけのソ連研究は危険な結果を生むということ

⁸ 日ソ文化協定に基づく交換留学生制度の枠組みで大学院生の留学が始まったのは1989年からであった。

だった。目耳口を駆使してのソ連研究でなければならぬと肝に銘じたものである。」

「学科所属教員が交替で、ペテルブルグ大学東洋学部で日本語教授を援助するとともに、各人の専門分野に応じて大学、研究所でロシア、ソビエト研究に努め、同時に市民の日常生活をも実体験することにより、本学におけるロシア語教育・研究の進化に多大の成果を収めた。」(山口 2007)

以上を踏まえ、大阪外国語大学が冷戦下のソ連高等教育省との間ですすめた教授交換の意義について、言語教育の点から考えてみたい。まず、国家の人材育成という点に着目する。従来、国家間の緊張が高まると、情報の収集や検証など解決に向け当該地域の専門家や通訳者の存在は欠かすことができず、その養成は、安全保障上重要な課題とされてきた。日本語教育に関していえば、英米が空前の規模で日本語教育に取り組んだのは、第二次大戦下であったが、小川(2020a)が紹介するように、歴史上、日本語教育の需要が高まった例は、各国、各時代の対日関係に連動しながら多数存在した。冷戦時代の教授交換もこの文脈でとらえるなら、当時の日本政府の基本的態度として、ソ連との人的交流には、イデオロギー上慎重な態度を示しつつも、一方で、ロシア語人材の育成は、安全保障上重要な課題であったはずであろう。

それに加え、本稿のケースは、日ソ間の人的交流を促し、ソ連における日本語の授業に彩りを添えたという点も注目すべきであろう。受講生にとって、日本人講師は、日本語の母語話者というより初めて出会った生きた日本人であったという。なかでも、当時の受講生の方から、ロシア語を話しロシア事情に詳しく「ロシアが好きな先生たちとの出会いは最高の宝物であった」という声が聞けたことは、本調査の中で特に印象的であった。この点については、あらためて考察の機会を持ちたい。

以上のことから、大阪外国語大学の取り組みは、当大学のロシア語教育やロシア研究の進化を促すとともに、日ソ間の人的交流をすすめ、レニングラード大学の日本語教育にも寄与したという側面も注目すべきであろう。人的交流や個人々人への影響、広報活動という点に着目すれば、国際交流基金の冷戦期の東欧圏に対する日本語普及、日本語教育支援の理念にも通じるものがあったといえよう。

ソ連がすすめてきた1920年代から50年代までの日本語教育・日本研究については、小川(2021)で論じてきた。言語教育は、学習者個人のキャリア形成とともに、学問の推進、国家戦略や安全保障上の人材育成、広報、次世代を見据えた人的交流の推進など、立場によっては多様な意義を持つ。他機関の例も含めた同時代の日本語教育について、さらなる考察の機会を持ちたい。

参考文献

- 池井優(1990)「戦後日ソ関係の一考察：日本対外文化協会の活動を中心として」『法学研究』63(2), 慶應義塾大学法学研究会, 45-64
- 大阪外国語大学70年史編集委員会編(1992)『大阪外国語大学70年史』大阪外国語大学70年史刊行会
- 小川誉子美(2020a)『蚕と戦争と日本語』ひつじ書房
- 小川誉子美(2020b)「ソ連の日本語教師岸田泰政」『日本語教育連絡会議論文集』33, 日本語教育連絡会議, 7-16
- 小川誉子美(2021)「ソ連の日本語研究・日本語教育—レニングラードを中心に」『新世紀人文学論究 特別記念号—全地球時代からの人文主義』4, 新世紀人文学論究編集委員会, 237-250
- 菊池靖(1977)「本学における留学生教育と交換留学生概観」『東海大学紀要』1, 留学生別科, 1-27,
- 黒岩幸子(2014)「ロシア文学語学学会の国際交流活動とネットワーク」早稲田大学現代政治経済研究所「日

本の対外発信」 研究部会ワーキングペーパー（2014年7月18日開催）
国際交流基金（1990）『ソ連における日本研究』Directory series XXIII
柴田俊造（1977）「モスクワ大学研修生のための日本語教育」『東海大学紀要』1，留学生別科，60-67，
柴田俊造，関正昭（2016）「日本語教育史インタビュー：柴田俊造氏に聞く」『東海大学大学院日本語教育学
論集』1(3)，東海大学大学院文学研究科日本文学科日本語教育学コース，1-31，
日本ロシア文学会編（2000）『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』ナウカ
法橋和彦（1984）「ピーヌス先生の思い出」『ソ連出版文化通信』ソ連著作権協会センター
山口慶一郎（2002）「ロシア語をわが人生の第二の伴侶として六〇年」『北窓会』会報 第10号
山口慶一郎（2007）「ロシア語学科85年の歴史を追って」『ロシア・東欧研究』12，大阪外国語大学ヨーロ
ッパI講座，1-12
「小野，法橋，荒武教授略歴・主要業績一覧」（1998）『ロシア・東欧研究（小野堅，法橋和彦，荒武鉄郎教授退
官記念号）』2，大阪外国語大学ヨーロッパI講座，231-248

謝辞

本研究のために当時の関係者の方々から、貴重な情報をご提供いただいた。また、多くの時間をかけて私の質問に丁寧なご回答をいただいた。心より謝意を表したい。

本研究は、JSPS 科研費 19K00735（「ロシア・中東欧の現代日本語教育史の記述—社会主義時代からの
変遷を中心に」 基盤研究(C) 研究期間：2019年04月 - 2023年03月 代表者：小川誉子美）の助成を
受けたものである。